

長崎六反遺跡

福岡県筑後市大字長崎所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第68集

2006
筑後市教育委員会

ながさきろくたんいせき
長崎六反遺跡

2006
筑後市教育委員会

序

筑後市長崎地区では「長崎坊田遺跡」をはじめとし、詳細分布調査等の結果から文化財が多く残る土地であります。

当市では現在も大規模開発から中・小規模開発などの緊急発掘調査が増加の一途を辿っており、破壊を受ける可能性がある遺跡を記録保存として調査を行い、貴重な財産である文化財の保護に努めているところであります。本来であれば、地下に眠る遺跡が現状で保存され、その土地に残ることが最善であるのは言うまでもなく、「保存」こそが絶対的に有効であり、文化財保護行政における使命と考えております。

昨今、急増する開発事業により記録保存として発掘調査を実施し、国民共有の財産である調査成果を文化財報告書として刊行し、住民サービスとして地域に還元するといった「文化財の啓発活動」も行政の役割であると考えております。

今回調査を行った「長崎六反遺跡」では弥生時代から近世の集落跡が調査され、当市における集落相を垣間見ることができました。

調査された成果から、先人たちが遙か昔からこの土地で暮らしていた生活の一端を紐解き、学術研究、生涯学習等の一助として活用いただき、目まぐるしく変化する現代社会の道標として役立てれば幸いります。

本報告にあたり、地権者並びに関係者各位に文化財へのご理解、ご協力を賜った事を深く感謝申し上げます。

平成18年3月

筑後市教育委員会
教育長 城戸一男

例言

1. 本書は平成17年度に筑後市教育委員会が行った長崎六反遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第Ⅰ章に記している。
3. 本書に使用した図面の遺構図は上村英士が作成し、遺物の実測、浄書は横井理絵が行った。
4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は上村が行った。
5. 今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を基準としている。
6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による（筑後市における埋蔵文化財の取り扱いについて：2002に準拠している）。
SD - 溝 SK - 土壌 SP - ピット SX - 不明遺構
また、本文中の出土遺物について○×○の表記は両方の可能性が考えられるという意味である。
7. 本書の編集、執筆は上村が行った。

目次

I . 調査経過と組織	1
II . 位置と環境	2
III . 調査成果	3
IV . 考察	6

写真図版

I. 調査経過と組織

長崎六反遺跡は筑後市大字長崎字六反に所在する。平成 16 年 10 月に開発原因者である井上博之氏より当該地について試掘・確認調査依頼が筑後市教育委員会に提出され、担当課である社会教育課文化スポーツ係による現地での試掘調査を実施した。試掘調査の結果、当該地全域で遺構が確認され、開発による埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。当該地は全域盛土保存、建造物構築部分の 165 m²については遺構が破壊を受ける可能性があるため本調査を実施することで合意し、平成 17 年 4 月 1 日に「長崎六反遺跡埋蔵文化財発掘調査」として契約を締結した。調査費用は全額井上博之氏に負担いただいた。平成 17 年 4 月 13 日から平成 17 年 4 月 26 日まで現地での本調査を行い、整理報告書作成作業を平成 18 年 3 月 31 日に完了した。

発掘調査に関わる調査組織は以下のとおりである。

1) 平成 16 年度（事前審査）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	菰原 修
庶務	社会教育課長	田中 優一
	文化スポーツ係長	成清 平和
	文化スポーツ係 (文化財担当職員)	永見 秀徳（事前審査担当） 小林 勇作
		上村 英士
		立石 真二
		阿比留士朗

2) 平成 17 年度（調査、報告書作成）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	菰原 修
	社会教育課長	田中 優一
	文化スポーツ係長	角 恵子
	文化スポーツ係 (文化財担当職員)	永見 秀徳 小林 勇作
		上村 英士（本調査、報告書担当）
		阿比留士朗

3) 発掘調査参加者

石橋 香代美 内野 康隆 江崎 トシ子 古賀 明美 下川 義文 城崎 マスヨ 辻 名草
辻 勝 富安 英子

4) 整理作業参加者

整理補助員 仲 文恵 横井 理絵 佐々木 寿代
整理作業員 野口 晴香 丸山 裕見子

II. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畠、東部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

今回報告する長崎地区は市のほぼ中央に位置し、近年は国道442号に沿った形で市街化している地域である。当地区での発掘調査は長崎坊田遺跡が知られているが、今次調査で2件目の本調査事例となる。

長崎地区的歴史環境について若干触れておく。

大字長崎は市政前は八女郡二川村であり、この二川の地名は郷土史や市史によると、山ノ井川と花宗川の二つの川が存在する地域である事から名づけられ、長崎はこの二つの川に挟まれた土地から名づけられたと記述されている。

この地区的標高は比較的平坦な地形を形成しており、調査地での遺構面標高は約7m程度である。地区内の文化財を古代から概観すると、郷土史研究会が弥生時代の遺跡が存在したと報告があり、古代には石塚寺といわれる奈良・平安時代の寺院の存在も報告している。しかし、現在のところ、これらに該当するような遺構等の検出には至っていない。中・近世には調査地から北へ150mの地点に長崎坊田遺跡がある。居館跡とされており、区画された溝、掘立柱建物が検出され、輸入陶器や国産の搬入陶器なども数多く出土している。

このように、長崎地区では歴史的に未だ不明な点が多く残る地域である。

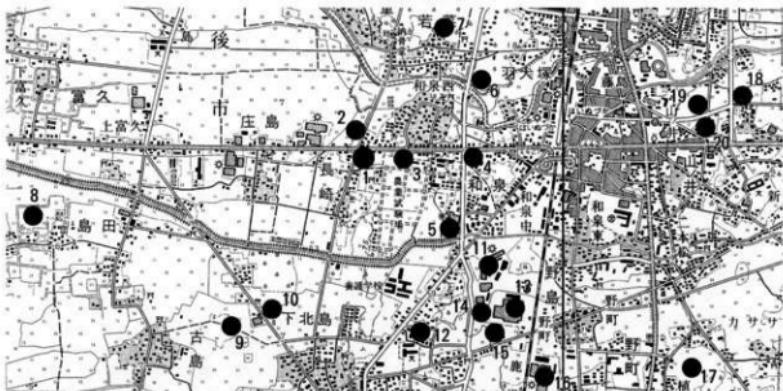


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/5000)

1. 長崎六反遺跡
 2. 長崎坊田遺跡（第23集）
 3. 和泉町遺跡（第65集）
 4. 和泉小山口遺跡
 5. 和泉近道遺跡
 6. 若菜森坊遺跡
 7. 若菜大堀、裏道遺跡（第67集）
 8. 彼岸田遺跡
 9. 古島梗崎遺跡
 10. 久清遺跡
 11. 井原口遺跡（第4集）
 12. 上北島篠島遺跡（第39集）
 13. 狐塚遺跡（第2集）
 14. 上北島花畠遺跡（第28集）
 15. 上北島塚ノ本遺跡（第31集）
 16. 平塚遺跡
 17. 鶴田木屋ノ角遺跡（第36集）
 18. 徳久中牟田遺跡（第19集）
 19. 山ノ井川口遺跡（第45集）
 20. 山ノ井南野遺跡（第59・64集）
- 括弧内数字は筑後市文化財調査報告書所収の番号

III. 調査成果

(1) はじめに

調査区は店舗建設部分のため、遺跡範囲 1089 m²のうち、約 165 m²の本調査を行っている。現況は田であり、北側の国道 442 号、西側の市道との高低差が約 40 cm 程度ある。遺構の掘削は表土から遺構面までを（有）フクシマ重機（代表 井上広志）に委託し、遺構面からは地元作業員による手作業の掘削を行った。

層位は約 15 cm の耕作土下に約 5 cm の床土を確認し、その下層に茶褐色土の包含層（中世）が約 15 cm、暗黒色土の包含層（弥生～古代）約 5 cm を除去した淡茶褐色土の地山に切り込む形で遺構を検出して いる。遺構はピット、溝、落ち込み若しくは整地を確認した。

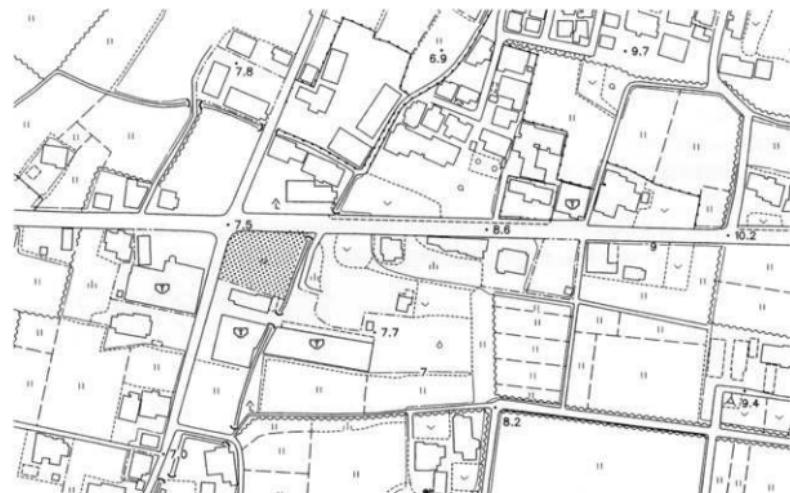


Fig.2 調査地点位置図 (1/2500)

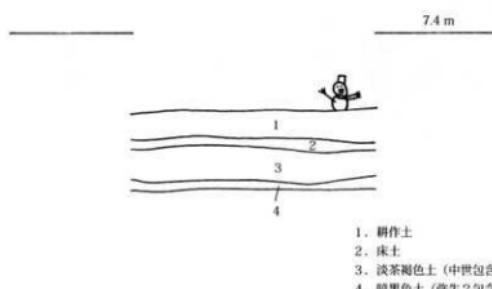


Fig.3 調査区 基本土層図 (1/20)

(2) 検出遺構

溝

SD01 (Fig.4・5, Pla.1・2)

調査区中央を南北にやや蛇行する溝である。検出長約10m、幅約0.2m～0.5m、深さ約0.05mを測る。全体が削平を受けており溝底部のみの検出と考えられる。埋土は暗黒色土の単一層で、遺物は弥生土器壺片、甕片、高坏片である。

ピット

SP02 (Fig.5)

調査区東南で検出したほぼ円形のピットで、木の根及び攪乱によるピットの可能性がある。検出幅約0.2m、深さ約0.15mを測る。遺物は陶器小碗×皿片である。

SP06 (Fig.5)

調査区西北で検出した楕円形のピットである。検出長軸約0.3m、短軸約0.25m、深さ約0.16mを測る。遺物は土師器甕片である。

SP12 (Fig.5)

調査区南西端で検出した楕円形のピットである。検出長軸約0.2m、短軸約0.15m、深さ約0.1mを測る。遺物は弥生土器甕片である。

SP16 (Fig.5)

調査区西端で検出した楕円形のピットで落ち込みを除去する過程で検出した。検出長軸約0.28m、短軸約0.22m、深さ約0.18mを測る。遺物は弥生土器鉢片である。

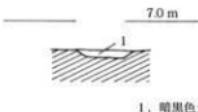


Fig.4 SD01 土層図 (1/40)

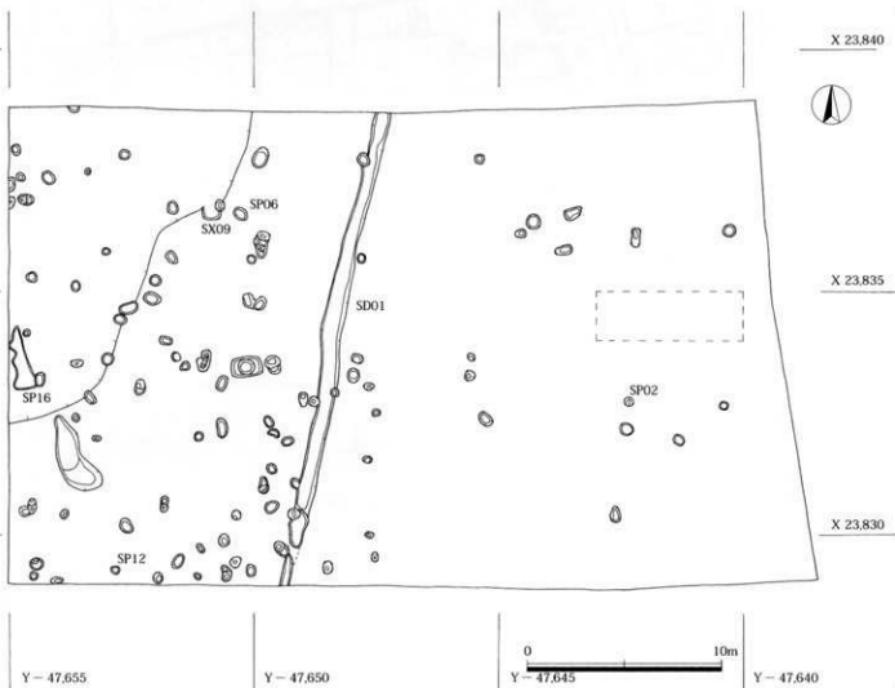


Fig.5 遺構全体図 (1/100)

不明遺構

SX09 (Fig.5)

調査区西北の落ち込みを切る長方形の遺構である。検出長軸約 1.0 m、短軸約 0.4 m、深さ約 0.04 m を測る。遺物は土師器鉢片である。

包含層

淡茶褐色土 (Fig.3)

基本土層 3 層である淡茶褐色土である。遺物は土師器小皿（糸切り）を出土している。

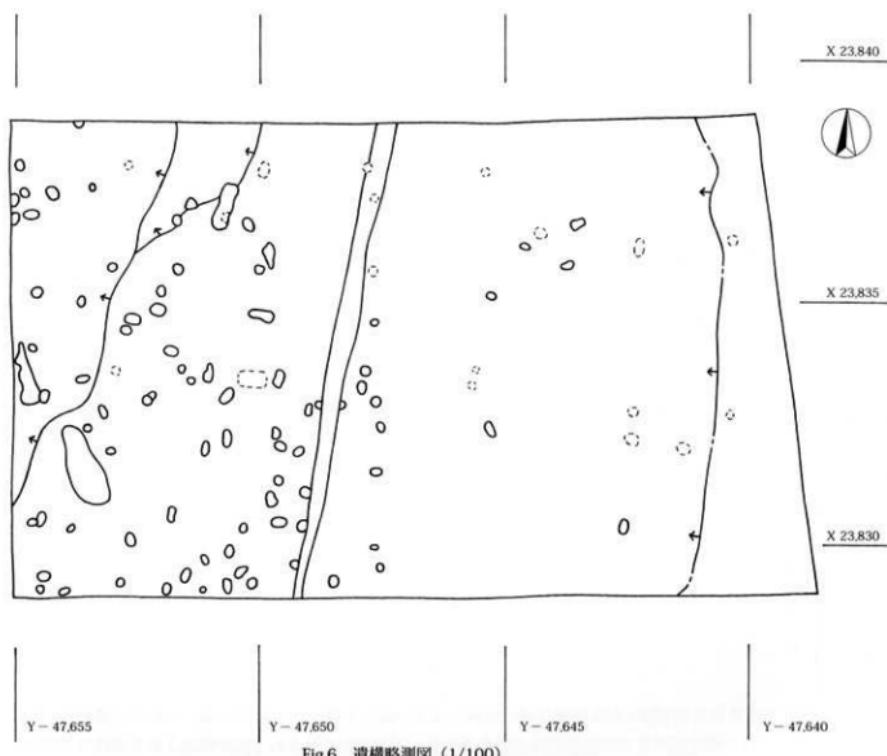


Fig.6 遺構略測図 (1/100)

(3) 遺物

溝

SD01 (Fig.7, Pla.3)

弥生土器

壺 (1・2) 1 は肩部片で、外面に重弧文と線刻文を施し内外面に横方向のミガキを施す。胎土は精選されている。焼成良好で外面は淡茶褐色、内面は淡灰茶色を呈する。2 は肩部片で、外面に横方向と斜方向にミガキを施し、内面は工具によるナデを施す。焼成良好で外面は淡黒色および暗茶褐色、内面は淡灰茶色を呈する。

甕 (3・4) 3 は口縁部片で如意形の口縁を呈し、口唇部に刻目を施す。調整はナデ。焼成良好で外面は暗茶褐色、内面は淡灰茶色を呈する。4 は体部下半の破片で内外面を不定方向のナデを施す。

ピット

SP02 (Fig.7、Pla.3)

陶器

皿 (5) 口縁部小片で、素地は淡茶白色、内外面に白色系の釉を施す。

SP06 (Fig.7、Pla.3)

土師器

甕 (6) 頸部片で、内外面ともに磨耗のため調整は不明。胎土は1mm～2.5mmの石英や角閃石等の小砂粒を含み焼成不良である。

SP12 (Fig.7、Pla.4)

弥生土器

甕 (7) 底部片で底径7.6cmを測る。調整は磨耗が著しく不明。外面は淡灰褐色および暗茶褐色、内面は淡灰褐色を呈する。

不明遺構

SX09 (Fig.7、Pla.4)

土師器

鉢 (8) 口縁部片で、内面に横方向のミガキを施す。外面はヨコナデ、内外面ともに淡灰茶色を呈する。

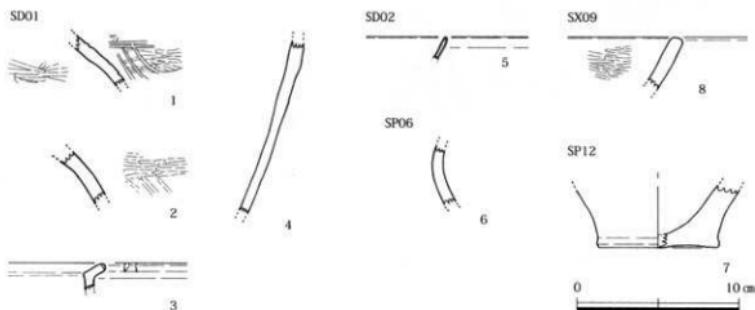


Fig.7 出土遺物実測図 (1/3)

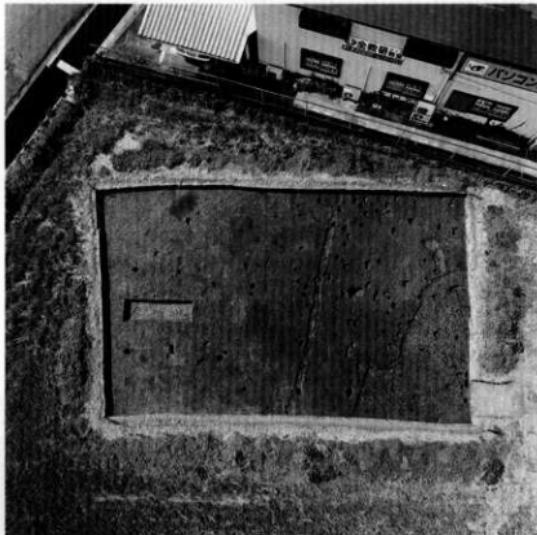
IV. 考察

検出された溝SD01からは弥生時代前期の甕等の破片を数点出土している。これらの遺物のなかでFig.7-3の甕は板付II式に相当すると考えられる。当市ではこれらの土器が確認される遺跡は常用長田遺跡などの市南部地域の一部でしか確認されておらず、中期以降の遺跡が散発的、若しくは点での確認ではあるが市全域（広い範囲で）から確認される事と相反する現象であり、今回の調査で前期の生活空間が市中央部まで延びる事が明らかになった。したがって、当市における前期の遺構や遺物等の集落の分布域等について常用長田遺跡などを絡めて再考していかなければならない。

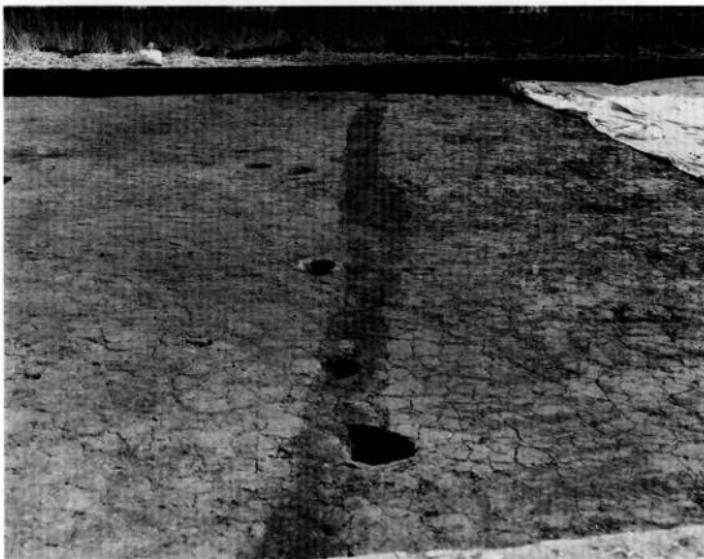
また、調査区北側には長崎坊田遺跡が存在し、中世の居館跡として遺物も豊富に出土しているが、今回の調査で若干の土器の出土はあったものの、関連性のある遺構・遺物には恵まれなかった。

今後は長崎地域での調査事例を待ち、今回の調査で得られた所見を含め、各々の時代の復元を試みなければならない。

写真図版

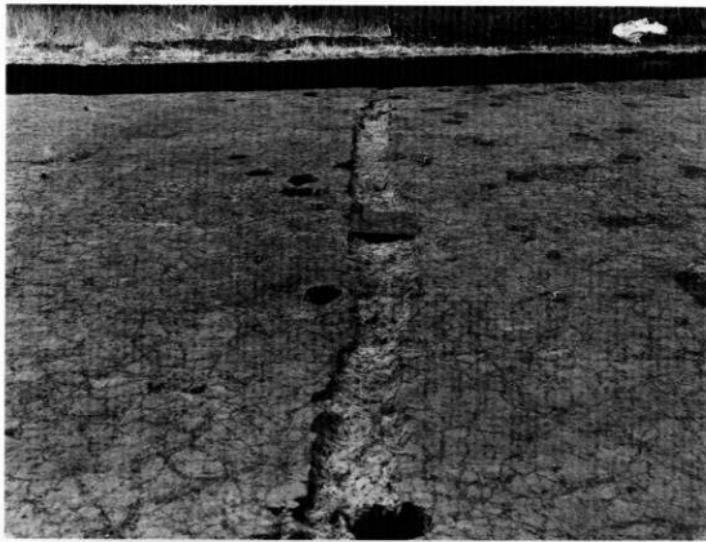


調査区全景（真上から）

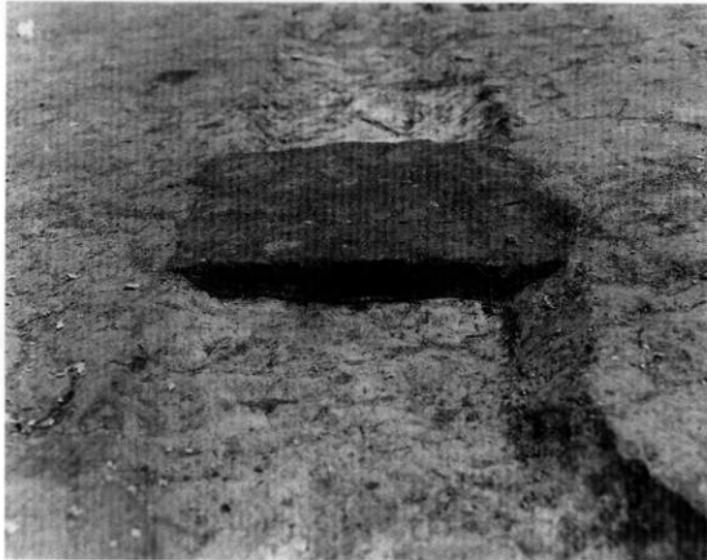


SD01 検出状況（南から）

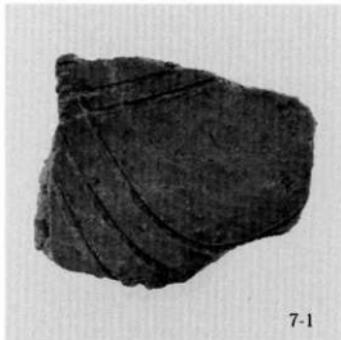
Pla.2



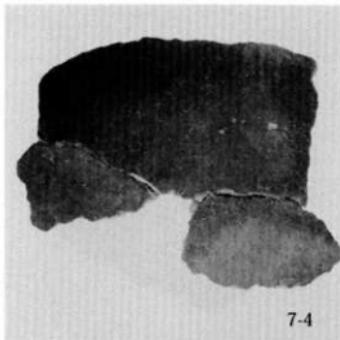
SDO1 完掘状況（南から）



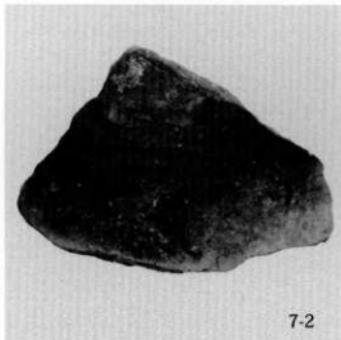
SDO1 完掘状況（南から）



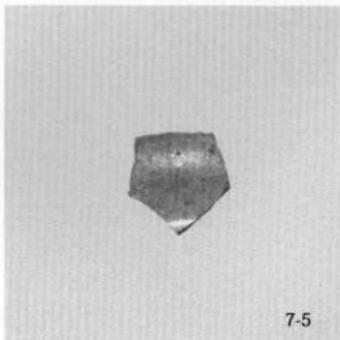
7-1



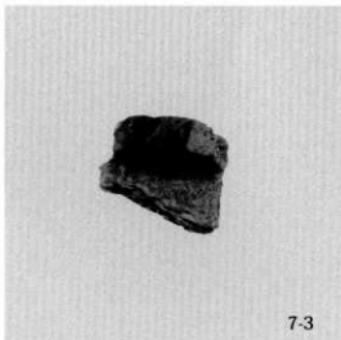
7-4



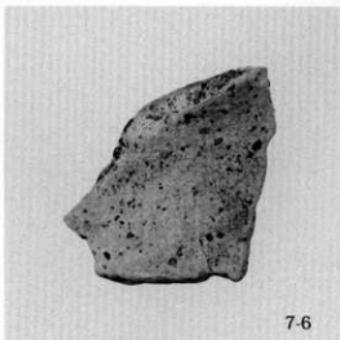
7-2



7-5



7-3



7-6

Pla.4



7-7



7-8

筑後市文化財調査報告書 第68集

長崎六反遺跡

平成18年3月31日

発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

TEL 0942-53-4111

印刷 大同印刷株式会社